

「ワン・ツー・ツリー」。これは、ツリークライミング体験会で写真撮るときに掛け声です。木になろう、という意味があります。「ツリー」のタテミニングで自分の腕を枝にみたくて広げるのです。みんな、とってもいい笑顔になります。

ツリークライミングは、ロープを使う木登りです。サドル（ハーネス）を履き、ヘルメットをかぶり、枝にかけたロープに結び付けたカラビナをサドルにつなぎます。主に足の力でロープを押し下げて登るので、小学生以上であれば、年齢、性別、体格、体力に関係なく、誰でも登れます。先日、八十四歳の方が登ってくれました。

ツリークライミングを体験した人は全員が楽しんでくれます。何回も通ってくれる子どももたくさんいます。大人が森に響き渡るくらい大声でしゃべることもあります。ツリークライミングには魅力があふれているのです。

報 サロン

自然の木に登るので、枝にかけたロープは一本一本条件が違います。だから競争になりません。自分のペースで自分が登れる所まで登れば満足できます。誰でも登れると言いましたが、決して楽ではありません。夏だとみんな汗だくになります。全身運動で心身が爽快になります。高い空中にぶら下が

るでしよう。たぐさんの生命に包まれる気にしたこの思いで、二〇一六（平成二十八）年にツリークライミング体験会を始めました。すると、思いを同じくする人が集まってくれ、二〇一七年、ツリークライミングクラブとんぐりの芽をみんなで作りました。田村市を中心に、年間十五回前後、クラブのみんなと体験会を開催しています。



久保 優司

ワン・ツー・ツリー

るので、少なからず怖さを感じているはずです。怖さに打ち勝って登ること、達成感や自信を持てます。はやり、バーチャルではなく、リアルな現実体験を自分の身体でできるのです。

これらはツリークライミングの魅力であり効果ですが、私が感じている最も大きな魅力は生命を感じられること

ることで、少なからず怖さを感じているはずです。怖さに打ち勝って登ること、達成感や自信を持てます。はやり、バーチャルではなく、リアルな現実体験を自分の身体でできるのです。

東京電力福島第一原発事故後、人は森から遠ざけられてしまいました。自然の力をお借りしてたぐさんの人を元

二〇一八年から、車いすの方対象の体験会も始めました。木に親しみ、自然の生命に包まれることは、全ての人

最後に安全についてお話しします。当クラブが所属しているツリークライミングジャパンは、ツリークライミングの世界組織と提携して安全な技術、道具を常に追求しています。当クラブも、世界基準の安全性を確保する努力を怠りません。皆さま、安心して、自然の偉大なる生命の中に飛び込みに来てください。（田村市都路町、森と里合同会社代表社員）

私の生業(なりわい)は林業です。森の木を切り、植林し、育てる仕事です。場所が狭く倒せない木を、ロープワークの技術を使って上から切って降ろす仕事もしています。

勤め人を辞め、林業の仕事をしてながら感じたことを話します。

林業で大変なのは、働く場所が自然の山だということです。植林はたまた木の苗を背負って斜面を登り降りします。木の苗を育てるための草刈りは真夏に行います。伐採した山に植えるので日陰がなく、暑い太陽を浴び続けながらの作業なので、かたまりです。ある程度育った木をさらに育てるために行う間伐は冬です。寒く、手ががじかむ中、重いチェーンソーや燃料を持って斜面で木を切ります。

でも、林業には、大変さをほめるかた上回る喜びがあります。まず、自然の厳しさを素直に心を肌で感じることができます。太陽が照り付ける中で吹

森サロシ

くやみ風がなると心地いいことが。寒さで身が凍えている時の日差しがなんと暖かいことが。動物、昆虫、植物、微生物、たくさん生命の中で自分の身体と知力を使って働くのは爽快です。森には、人間関係などのストレスはありません。

そして、人の思いを感じることができ

思いをつなぐ



久保 優司

自分のためではなく、後の世代のためなので、やりがいを感じます。

それと、林業はごまかしがきかない仕事です。いい加減に植えた苗は枯れます。いい加減に草を刈れば苗を切ってしまう。いい加減に木を切ると自分や仲間の生命を危険にさらします。うそも言い訳も通用せず、やった

きます。今、切っている木は、祖父や父の世代の方々が、植えて育ててくれたものです。私たちが切って使うことを思ひ、苦勞して育ててくれたものを、苦勞して育ててくれたもの。私の世代も同じことをしています。もちろん仕事として収入を得ますが、育てたものが形になるのは嬉しいです。きつい山での作業が、今の

と先です。きつい山での作業が、今の

り笑ったりしたい。大人はもちろん、子どもたちが地元を誇りを持つ地域づくりをしたい。東京電力福島第一原発の事故で入れなくなった山の整備をしたい。このような思いを共有する四人が集まり、今年四月に林業の会社を立ち上げました。私が生きているうちに実現できなくとも、その種まきができたいと思っています。

最後になりますが「雨ニモマケズ」の詩で有名な宮沢賢治の言葉を紹介します。詩人で童話作家の賢治は、一九三三(昭和八)年に亡くなる前、農民芸術概論綱要という論文の中に、次の一節をつづっています。「世界がぜんたい幸福にならなければ個人の幸福はあり得ない」。今の世だけに限らず、世代を超えて思いがちなことが、みんなが、そして個人が幸福になるための道しるべだと思えます。

(田村市都路町、森と里合同会社代表社員)